

「それでは、どのようなものか其の功徳ですか？」

驚いた武帝は更に質問しましたが、達磨は行動そのものに捉われず、心の静寂と悟りを求めるべきだと説きます。

「真の智慧と円満な境地は精神的であり空寂そのものであり、その功徳はこの現実社会には求めようがないのです」

「見かけだけの功績は禅では無意味なのです」

と説いたのです。

もうこの時点で武帝は仏教を深く学んでいました。それでもまだ仏教を世俗の視点からしか理解していなかったのです。

つまり、世間の知恵や生き方よりも優れたものを探したのですが、それは世間的価値の延長でしかないのです。もっと賢くなる、豊かになろうと努力しても、その努力は無意味だと達磨は断じました。



梁の都 金陵

その無意味な仕事を一旦止めて休むことが、達磨の坐禅なのです。

もし坐禅が胆力を養うための手段であったり、国家発展のための事業であったり、病気の治療であるならば、それは世間の法、すなわち処世術や健康法、人心操作であり、決して達磨の禅ではありません。文化的発展のためというのすら世間向けです。

達磨の武帝への答えは、壮麗な寺院の建築や美術の啓蒙は、有為（この世の全ての現象や存在）の功績だからこそ、無功徳と断言したのです。



達磨と武帝の対談



日の明け方に妻の夢を見ました。それが何と、庭に咲いたあじさいの花を妻が笑顔で覗き込んでいた姿だったのです。だから私は会社から帰るとすぐ、庭のあじさいを妻の仏壇に供えたのでした。

妻が亡くなってから、何度か夢を見ましたが、でもそれは、妻が病気で布団の中で休んでいる夢でした。私がその体を抱きおこし、「あよかった、生きていて」という、そんな夢ばかりでした。

朝、目をさますとあの白い蝶をさがしました。しかし、もうその時、蝶は部屋のどこにもいなくなっていました。窓はみんな閉めてあり、どこへも出られないはずなのに……

は、どこから逃げたのだろうか？ そう思うと、本当にあの白い蝶が妻に思えてならなくなつたのです。そんな馬鹿なことと思つても……

でも、どう考えた

つてそんなことがあ

るはずがないといく

ら思つても、では何

故？ どうしていな

いのか。外へは逃げ

られないのに。

いつもなら、気に

もとめないこんな事

が、妙に私の心にひ

つかかるのです。や

はり、あの蝶はきつ

と政子だったに違

ない。たしかにそう

だ。

ひとりでなつて

も、頑張つて生きて

いこうとしていた私

に会いに来たんだ。

でも、そんな馬鹿

なことが……と

思いながらも、私は

そう思うことにした

のです。

そうするとまたい

つかあの白い蝶が、

私のもとへ飛んでき

てくれるという期待

が胸の中で膨らむの

です。他人に言え

ば笑われる、妻を亡

くして気が変になつ

たと思われに違いな

い。



お父さんのことを、心配して、きつとまた来るよ」そう言つてくれました。

次女も「お母さんだよ、それは、お母さんの霊が蝶になつて、飛んできたんだよ。私も信じるわ」娘二人は真剣にそう言つてくれました。

それだけでいい。

六月二十四日、小雨降る夜の出来事で、私の心の中に、いつまでも忘れられない、本当はただの迷い込んだ蝶か

もたれない。でもど

つちでもない、娘た

ちが信じてくれたこ

の白い蝶を、私はい

つまでも私に会いに

来てくれた亡き妻と

信じ、その想いを胸

に、頑張つて生きて

いこうと思ひます。

追記

ことは、確かに心配

で、恐ろしいことか

もしれません。自分

が学んだ知識や蓄え

た経験で、何とか答

えを導きだしたいと

思うのは当然のこと

と思ひます。

しかし、無理に理

屈をこねて理解しよ

うとせず、また根

拠を求めようとしな

い。

「わからない」と心

から納得することが

できれば、大久保さ

んのように、きつと

自然体でポジティブ

に生きて行けると思

うのです。

